

## 新春挨拶

### 新年のご挨拶

一般社団法人日本作業船協会 会長  
齋藤 保



会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は地震、台風、豪雨が列島各地で頻発しました。被災あるいは今も避難生活を余儀なくされている皆様に心よりお見舞いを申し上げますとともに、本年はハードとソフト両面から災害対応力が向上充実され、皆様にとって希望の見いだせる新年となることを切に祈っております。

昨年はまた、リオデジャネイロで開催されたオリンピック・パラリンピックでの日本選手の活躍、ノーベル賞受賞者を連続して輩出したことなども記憶に新しく、我が国の勤勉な姿勢と資質に大きな誇りを感じました。

本年は英国のEU離脱や米国新大統領の就任により、世界情勢には大きな変化が予想されますが、景気刺激策及びイノベーションの創発による早期の景気回復を待ち望んでおります。

港湾関連事業に目を向けますと、近年のクルーズ旅客数の大幅な増加を受け、2020年に500万人を目標とした港湾の受入環境整備が推進されております。また、北九州市で洋上風力発電の設置・運営事業者が公募され、秋田港・能代港においては実現可能性調査が開始されました。このような事業を通して地域の活性化とブランド化が形成されていくと考えています。

さて昨年12月6日にH-II B 6号機で打上げられた「こうのとり」は宇宙ステーションに補給物資を運ぶ宇宙（作業）船です。宇宙でも作業船が活躍しているので大変嬉しく思っています。一方海洋の作業船分野については、我が国では、2015年1月現在で約

6,000隻の作業船が稼働しております。2003年時点から隻数の微減が続いておりますが、最近では外洋や離島での海洋工事や資源調査開発などに従事する多目的作業船の建造が目立ちます。

弊協会の自主研究においては、浮体の係留ラインの設計理論・手法を比較検討し、係留鎖・索や錨の選定方法と安全係数の考え方を整理し、利用しやすい資料作成を目指しております。気球空撮システムは小型軽量化し、無線混信に邪魔されないシステムに改良しました。捨石投入作業支援システムは捨石マウンドを三次元で表示するシステムに改良しました。いずれもi-constructionのツールとしての活用が期待されます。また、環境負荷削減に優れたLNGを燃料とした作業船の技術検討を昨年末から国土交通省港湾局と共同で開始しました。

港湾局所有の大型浚渫兼油回収船および環境整備船ならびに港湾業務艇、自治体向けの港内清掃船や業務艇の基本設計・建造監理・技術開発を受注実施してまいりました。また、海外向けのPilot station vesselや大型給水船などの6船種、係留ブイや陸上機材について一昨年より基本設計を行い、設計技術の幅を大きく広げてまいりました。数年前には海外造船所においてドラグサクシオン浚渫船等の入札支援、図面審査と建造監理も実施しております。

本年も弊協会は、国内外で蓄積してきた技術と経験を活かして、作業船および関連技術の発展に寄与してまいります。会員の皆様、国土交通省ならびに自治体のご指導、ご支援を重ねてお願い申し上げます。会員の皆様にとりまして本年が良い年となりますことを祈念いたしまして、新年のご挨拶といたします。